報告書

本研究に多大なるご理解とご支援を賜りました故川上宏先生とご遺族の皆様に厚く御礼申し上げます。

１．研究題目

「ひとりじゃないってわかったから」――支援者が介護の当事者であること――

２．研究について

本研究では、当事者支援組織が認知症の家族介護者にもたらしているものについて明らかにするため、「認知症の人と家族の会（以下、家族の会）」千葉県支部の会員5人を対象に半構造化インタビュー調査とフィールド観察調査を行った。

研究を進めるうえで、認知症の家族介護者はどのようにして認知症介護を受け入れてこれに取り組めるようになったのか、またそのプロセスの中で家族の会が介護者にもたらしたものは何かという 2 つの調査疑問を立てた。

認知症の人と家族の会千葉県支部に協力を依頼し、現在家族の会の運営に携わっている支援者 4 人と現役の介護者 1 人、計 5 人を調査協力者とした。2022 年 3 月に 1 期調査、2022 年 8 月に 2 期調査を実施し、対面もしくは ZOOM を用いたオンライン上で 45 分から 1 時間をかけてインタビューを行った。

当該の家族が認知症ではないかと疑うきっかけから介護者としての覚悟を固めるまでのプロセスの中には以下の 3 つの特徴があることがわかった。1つめは、それまでの人生を当該家族と共にしてその家族がどのように生きてきたか生活してきたかを知っているゆえに感じる違和感に起因して認知症を疑うようになったということである。2つめは、情報収集と同じ境遇を共感しあう仲間との出会いを目的として家族の会に参加したこと、3つめは、介護の経験がなかった調査協力者たちにはそれぞれ介護の受容に対して壁となる要因があり、それを乗り越えて介護を受容したことである。

家族の会の支援者は介護の当事者であり、他のかたちの介護支援で得られなかったものを介護者にもたらしていた。家族の会の支援者に対して、介護者たちは話しても分かってもらえないという不満を持つことはない。家族の会は他の人に話せないという制約から解放することで、介護者たちに自身の思いを受けとめてもらえる場所や仲間の獲得、孤独感

の解消といった安心感をもたらしていた。同時に、安心感を感じることによってもたらされた介護への活力が介護へのさらなる適応を促進していた。また、家族の会を運営するにあたって自身の介護経験を現役の介護者に話すということは、看取りを終え支援者となった調査協力者にとって、認知症であった家族を失った喪失感から回復するための機会となっているのではないかと推測された。

最後に、家族の会が直面している課題と展望について論じた。家族の会の課題として地域差、活動の頻度増加、国が構築しようとしている新たな支援体制との連携という3点が調査協力者によって指摘された。一方で、この3点の課題に共通するものである、現在の家族の会の改善すべき運営体制については、調査協力者からの言及はなかった。認知症の介護者を多方面で支えている家族の会であるが、ボランティアを中心とするその体制から明らかなのは家族の会もまた支援が必要な状況にあるということである。この点については結論において筆者の考えとして指摘を行った。